

慰霊の日に「沖縄陸軍病院之塔」 「沖縄戦殉職医療人之碑」に献花、焼香して 「沖縄医療団会議」を振り返る

副会長 田名 毅



2023年6月23日の午前中に、安里哲好会長、稲田隆司常任理事、上原貞善事務局長、崎原靖課長と5人で、「沖縄陸軍病院之塔」「沖縄戦殉職医療人之碑」に献花、焼香して来た。沖縄戦において医療人として最前線で任務に携われた先達の方々のために建立された塔、碑を慰霊の日に訪ねることを通し、現役の医療人である我々も沖縄のための医療に尽くすという真摯な思いを強くした。医療人も戦争を知らない世代がほとんどとなった現在、この塔、碑の歴史を現在の医師会会員に紹介すべきと考えた。

また、本記事を掲載するにあたり、沖縄戦直後の沖縄の医療と公衆衛生という記録を読む機会を得た。その中で沖縄県医学会の前身である「沖縄医療団会議」の記事は、医学会参加者が減少している最近の状況を考えて時に、沖縄の医療の歴史を振り返り現役の会員の思いを新たに作る機会になると考えて追加引用した。以下に過去の医師会雑誌からそれぞれの関連記録を紹介する。



塔の正面写真



石碑表



石碑裏

(1) 沖繩戦体験と慰霊祭

(出展：沖繩県医師会史 2 - 祖国復帰から新会館建設まで - P512、2011年3月)

■会員の諸活動

142



沖繩戦体験と慰霊祭

沖繩陸軍病院慰霊会長 長田 紀春

1945年2月軍医見習士官として召集され、陸軍病院第三外科に勤務する。沖繩戦にて摩文仁へ敗退した時にひめゆり壕へ看護婦・学徒と共に避難しました。後日軍医部へ転属し生還しました。亡き戦友の慰霊として毎年陸軍病院慰霊祭を主催しております。

よる慰霊祭の件が協議され、さらに同年10月関係団体との協議を経て、同年11月10日、摩文仁の殉職医療人之碑前で厳粛で盛大な祭礼が行なわれた。その後、毎年6月23日の沖繩慰霊の日には、医師会執行部は先ず殉職医療人之碑に詣て供花焼香を済ませた後、摩文仁の丘の合同慰霊祭に参列するのが習慣となった」

追補

会史編纂委員会

長田紀春先生は第二次大戦中、軍医として南風原町の沖繩陸軍病院壕で、後に糸満市摩文仁の第三外科（ひめゆり）壕で、動員された看護婦及び女子学生と共に、多くの傷病兵の治療に当たられた貴重な体験の持主である。

「福木の白花」に記載されている
長田紀春先生の短歌

地獄絵のような戦場から生還された長田紀春先生は、戦後まもなく、沖繩陸軍病院慰霊会を結成し、会長として毎年6月23日に慰霊祭を行っておられる。1964年1月には摩文仁の丘に「沖繩陸軍病院之塔」が建立された（1992年再建）。近くには「沖繩戦殉職医療人之碑」「ひめゆり之塔」「平和祈念公園」がある。

- ・とどろ鳴る艦砲射撃に砕かれて
入院壕つぶれ病兵埋まる
- ・切り落せし兵の脚をば埋めにゆく
女子学生ら唇噛み駆ける
- ・壕出でてまぶしく真日を仰げども
暗しと思ひぬいくさ敗れて
- ・黒髪を梳りてやりて乙女らは
友埋めむとす野の花も添へ
- ・わが胸の洞に亡き戦友うずくまり
摩文仁伊原に慰霊の日迎ふ
- ・痛きまで戦恩べと六月の雨は
ひかりてわが頬を打つ
- ・天つ日もおだしき光をそそげかし
傷負い眠る丘のみまたに（歌碑）

第二次世界大戦で戦死した医療人は、医師44名、歯科医師5名、薬剤師8名、獣医師10名、衛生下士官と兵士40名、看護婦69名、女子軍属100名、県外から来て沖繩戦に参加した部隊の軍医、衛生将校142名（32都道府県）である。

長田紀春先生著『福木の白花』には次の様に記されている。

「医療人としての任務を尽くし、不幸敵弾にたおれた屍を戦場に晒した尊い犠牲者のあったことを忘れてはならない。その人達の霊を慰め事績を後世に伝えることは、生き残った医療人仲間の責務である。

1951年9月20日の理事会で全医療人団体に

ながた・きしゅん
出身校 千葉大学医専
役 職 元長田医院院長

(2) 戦没医療人の碑 (出展：沖縄県医師会史 - 終戦から祖国復帰まで -P26、2000年3月)



碑の正面写真



沖縄県薬剤師会の方々との集合写真

戦没医療人の碑

1945 (昭和20)年9月には沖縄の熾烈な戦争もすべて終わりを告げ、翌1946 (昭和21)年になると、医療関係の方々も各地区の病院や診療所に配置され、各々の技術を駆使して、戦後の多数の戦病者の治療に活躍するようになった。

その頃、各地区に分散していた家族、親類、知人の消息が日を追って明らかになるにつれ、祖国のために一身を捧げて犠牲になられた医療関係者のお名前も次第に判明したが、その悲報が伝わるや、ご家族並びに関係者一同は悲嘆の憂いに包まれ、涙を流して追慕の念を深くされたのである。

1946 (昭和21)年の1月に「ひめゆりの塔」、7月に第三外科の碑が相次いで建立されたのを知らされるや、期せずしてご遺族はその近隣に地を定められ、木製の碑を建て、殉戦者の御霊をお慰め申し上げ冥福を祈られた。

1947 (昭和22)年の夏に開催された沖縄医療団会議の席上沖縄医療団会議の席上において、10月28日に合同慰霊祭を現地に於いて執り行うことと、医療人の碑の建設案が提出され、全会一致で可決された。やがて各地の医療関係者を中心にして集められた浄財により、ひめゆりの塔の傍らに現在の「戦没医療人の碑」が完成し、1948 (昭和23)年1月28日に除幕式が挙行された。題字は卒宮城瑞芳先生の揮毫である。

戦没された民間の医療関係者 (医師、歯科医師、薬剤師、獣医師、助産婦、医療技術者) を記ると同時に戦死された軍医、衛生兵、軍病院関係の職員の御霊をひろく合祀し、毎年6月23日の慰霊の日には、ご遺族や医師会等の三師会及び関係者が参拝されている。

沖縄戦殉職医療人の碑合祀者名

民間の医師	沖縄出身軍医	予備軍医
新垣 寛 保 (那 覇)	新崎 康 健 (大宜味)	伊 佐 善 雄 (普天間)
伊礼 正 次 (辺土名)	石垣 幹 (八重山)	石川 盛 徳 (美 里)
伊礼門 正 恒 (勝 連)	上江洲 毅 (久米島)	上 原 啓 一 (糸 満)
金城 嘉 保 (那 覇)	嘉手川 重 達 (那 覇)	大 城 勲 (那 覇)
金城 敬 持 (糸 満)	幸 地 哲 郎	大 城 幸 雄 (玉 城)
宜 保 俊 一 (豊見城)	當 山 哲 太 郎	我如古 楽 文 (東風平)
小橋川 善 盛 (中 城)	渡久地 政 一 (那 覇)	酒 井 吟 之 助 (那 覇)
平 良 正 (首 里)	仲 里 朝 雄 (首 里)	鳥 袋 一 夫 (那 覇)
平 良 肇 (首 里)	仲 本 将 英 (那 覇)	城 間 盛 光 (県病院)
嵩 原 安 春 (与那原)	浜 川 猛 (久米島)	天 願 建 三 (具志川)
照 屋 清 雄 (大 里)	浜 松 繁 (那 覇)	仲 本 将 吉 (那 覇)
仲 間 邦 夫 (具志頭)	比 嘉 堅 昌 (越 来)	吉 田 安 徳 (与那原)
中 村 英 信 (那 覇)	比 嘉 盛 健	
仲村渠 林 一 (玉 城)	比 嘉 盛 繁 (津 波)	
鉢 嶺 喜 良 (那 覇)	外 間 良 康 (大 里)	
比 嘉 栄 真 (那 覇)	宮 城 源 雄 (羽 地)	
宮 城 仁 (久 場)	与 儀 重 豊 (平 良)	
屋富祖 徳次郎 (那 覇)		

報 告
 (3) 沖繩医療団会議 (出展：沖繩県医師会史 - 終戦から祖国復帰まで -P35、2000年3月)

沖繩医療団会議

医療団医学会も発足、多発した疾病に対応

沖繩医療団の第1回会議からほぼ1年後の1947(昭和22)年4月に沖繩医療団主催による沖繩医療団医学会がコザ中央病院で開かれ、以後医学会は年2回のペースで開催された。当時の沖繩の医療界の問題は、沖繩戦で住民の基礎体力が弱くなり、いろいろな疾病や、風土病が流行していたことである。また、日本の医学はドイツ医学が主流だったのが、アメリカ医学にとって替わられた為、その対応と、第二次世界大戦で生み出された新薬との対応にも悩まされた。

表3の推移からもわかるように、マラリア、日本脳炎、アメーバ赤痢、結核が戦前では想像もできないほど多発した。特に八重山に限られていたマラリアが、戦争中多数の人達が疎開した沖繩本島北部で多発し、沖繩の人で一度もマラリアを経験したことのない人はいないといわれたほどの大流行となった。その状況について民政府便覧は『終戦直後北部地方に発生したマラリアは急速に全住民地区に蔓延し、患者数16万98人を算し1946年

表3 沖繩民政府時代の主な伝染病の統計的推移

疾病年数	マラリア		日本脳炎		アメーバ赤痢		全結核	
	発生	死亡	発生	死亡	発生	死亡	発生	死亡
1946	160,098	660	31	4	1,785	48	4,499	204
1947	120,560	467	196	68	1,865	95	4,726	300
1948	31,860	196	61	24	247	18	2,414	296
1949	6,456	74	48	19	64	4	1,749	292
1950	1,202	20	20	9	66	6	2,254	309

備考：1 1946(昭和21)年は4月より12月までの数字である。
 2 結核は登録制度が行われていない。

8月の如きは、1ヵ月間にマラリアによる死亡者150人を出すの惨状を呈した』と伝えている。

沖繩医療団の医学会は、このような状況にどう対処するかなど、各自の研究結果などを披露し、その対策などを語りあった(表4)。

1950(昭和25)年11月、沖繩群島政府の創立に伴い、沖繩医療団、沖繩医療団医学会は発展的解消を遂げ、1951(昭和26)年1月に沖繩群島医師会、沖繩群島医学会として再出発した。

沖繩医療団学会は現在の沖繩県医学会の前身的役割を担ったものである。

表4 沖繩医療団医学会開催記録

第1回	1946(昭和21)年4月16日 胡差中央病院 演題数 21 感染症・寄生虫6(マラリア3)
第2回	1947(昭和22)年10月30日 宜野座病院 演題数 22 感染症・寄生虫11(マラリア5, 脳炎3)
第3回	1948(昭和23)年4月27日 名護病院 演題数 18 感染症・寄生虫5(マラリア1, 結核3)
第4回	1948(昭和23)年12月20日 知念地区病院 演題数 21 感染症・寄生虫10(マラリア1, 脳炎3)
第5回	1949(昭和24)年4月28日 石川地区病院 演題数 16 感染症・寄生虫4(マラリア1, フィラリア1)
第6回	1950(昭和25)年4月20日 前原地区病院 演題数 22 感染症・寄生虫7(結核4)

終わりに

私は今回はじめて「沖繩陸軍病院之塔」「沖繩戦殉職医療人之碑」に献花、焼香したが慰霊の日の午前中、現地までの車でアクセスは混雑することもなくスムーズに到着することが出来た。会員の皆様もご検討いただければと考える。来年からは沖繩県医師会の理事者全員で行えるように取り組みたい。

また、「沖繩医療団会議」の議事はコロナ禍の対応に追われる現在、終戦直後から先達が感染症対策にいかに取り組んできたかを理解する一助になる。沖繩県医学会の発足の歴史的意義を会員の皆様が再認識する貴重な資料と考える。時代は変わっても、会員の皆様と一緒に歴史ある沖繩県医学会を盛り上げて行きたいと考える。